

米国メソジスト監督派教会 女性海外伝道協会のイタリアにおける活動 —日本との比較を通して—

齋藤 元子

1. はじめに

筆者はこれまで、米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会 (The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church) より明治期の日本に派遣された女性宣教師たちの学校教育や文筆・出版など多方面に及ぶ活動を論じてきた¹。その際に史料として依拠したのは、協会機関誌 *Heathen Woman's Friend* (1896年より *Woman's Missionary Friend*) や協会設立10周年などの節目ごとに編纂された協会史である。これらの史料を調査する過程において、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会は、イタリアにも女性宣教師を派遣し、女学校を設立するなどの活動を行っていた事実を知った。

19世紀後半のアメリカに起こった女性海外伝道運動は、宣教師の妻としてアジア・アフリカの異教地に渡った女性たちが、現地の女性の生活を目の当たりにし、その虐げられた姿に衝撃を受け、異教徒の中でも、まず女性がキリスト教の福音によって救済されなければならないと痛感したことが発端となった²。

¹ 齋藤元子『「地理的知識」の普及と明治期来日アメリカ人女性宣教師』お茶の水女子大学提出学位論文 (2006年)；齋藤元子『女性宣教師の日本探訪記 —明治期における米国メソジスト教会の海外伝道—』(新教出版社、2009年)

² 前掲書1『女性宣教師の日本探訪記 —明治期における米国メソジスト教会の海外伝道—』36頁

メソジスト監督派教会も、インドに赴任した宣教師の妻が、社会的に隔絶されているインド人女性への伝道に専従できる独身女性宣教師の派遣を要請したことが協会の設立を促した³。

イタリアは、言うまでもなく、キリスト教国である。なぜ「異教女性への伝道」を目的に結成されたメソジスト監督派教会女性海外伝道協会が、イタリアに女性宣教師を送り込んだのであろうか。イタリアの女性は虐げられていたのであろうか。メソジスト監督派教会女性海外伝道協会はカトリック教会をどのように捉えていたのであろうか。女性宣教師の活動に対してカトリック教会はどのような反応を示したのであろうか。メソジスト監督派教会以外の米国プロテスタント教会もイタリアに女性宣教師を派遣していたのであろうか。様々な疑問が浮かんでくる。

筆者は日本伝道についての史料調査を行う中、イタリアに関する記述に出会うたびに、上述の疑問が頭をよぎり、いずれ機会があったら、これらの疑問を解明してみたいと考えていた。本稿はその試みである。これまで筆者が考察を重ねてきたメソジスト監督派教会女性海外伝道協会の日本における活動との比較を通して、イタリアでの活動実態とその特殊性を明らかにすることを目指す。論文構成は以下の通りとする。まず、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会のイタリアにおける活動の内容を時系列的に示す。次いで、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会とカトリック教会との関係性を考察する。そして、最後にメソジスト監督派教会女性海外伝道協会の日本における活動との比較を行ないつつ、イタリアにおける活動の特徴・意義・問題点などを明らかにしたい。

2. メソジスト監督派教会女性海外伝道協会のイタリアにおける活動の推移

メソジスト監督派教会女性海外伝道協会により、イタリアへの女性宣教師派遣が開始されたのは、1885年のことであるが、親組織であるメソジスト監督派教会からは、1871年男性の宣教師ヴァーノン(Leroy Monroe Vernon)がすでに送

³ 前掲書1『女性宣教師の日本探訪記 ―明治期における米国メソジスト教会の海外伝道―』45頁

り込まれていた⁴。1877年には、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会が経費を負担して、ヴァーノン宣教師夫妻の監督下、ローマとヴェニスにおいて3名のバイブル・ウーマンが採用された⁵。これがメソジスト監督派教会女性海外伝道協会によるイタリア伝道の始まりである。バイブル・ウーマンとは、現地の女性であり、家々を訪ねて聖書を朗読し、その家庭の女性たちを教会の礼拝へ、子どもたちを日曜学校へと勧誘する活動に従事した。

1879年、ヴァーノン宣教師はアメリカのメソジスト監督派教会女性海外伝道協会本部に対して女性宣教師の派遣を要請し、1881年には協会の役員がイタリアの視察に訪れた。ヴァーノン宣教師は1883年、重ねて本部に女性宣教師の派遣を求めた。そして、ついに1885年エマ・ホール（Emma Hall）が女性宣教師第一号としてイタリアにやって来た⁶。

ホールはイタリア語の知識が多少あり、着任後直ちにローマで日曜学校の支援を開始した。また、バイブル・ウーマンや日曜学校の教師の助けとなるテキスト“International Sunday School Lesson”の作成やイタリア語教会新聞の発行準備に取りかかった⁷。

1877年に開始したバイブル・ウーマンの活動は、ホールが赴任した1885年に至っては、ローマ、ヴェニスのほか、トリノ、ミラノ、ボローニャ、ペルージャ、ナポリなど、イタリア半島の主要都市に拡大していた⁸。1886年秋には、ホールがバイブル・ウーマンを直接監督する責任を負うようになる⁹。

⁴ Chiarini,P, “The Methodist Episcopal Church in Italy: 1871–1915,” *Methodist History*, 39-3, 2001, p.181.

⁵ Baker,FJ., *The Story of the Woman’s Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, 1869-1895*, Cranston & Curtis, 1895, p.357.

⁶ 前掲書 5 *The Story of the Woman’s Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, 1869-1895*, pp.359-360.

⁷ 前掲書 5 *The Story of the Woman’s Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, 1869-1895*, p. 360.

⁸ 前掲書 5 *The Story of the Woman’s Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, 1869-1895*, p. 357.

⁹ 前掲書 5 *The Story of the Woman’s Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, 1869-1895*, p. 360.

1886年から87年にかけてのメソジスト監督派教会女性海外伝道協会からのイタリアの活動への割り当て金額は 3,900 ドルで、その大半がバイブル・ウーマンの経費に用いられた。ちなみに、同年の日本への割り当て金額は 37,674 ドル、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会最大の活動地であるインドへの割り当て金額は 55,337 ドルであった¹⁰。

1887年には、13の都市で13名のバイブル・ウーマンが活動していた。中には、聖書の朗読や教会新聞・冊子の配布など本来の活動に加えて、病人や貧困者の世話、無料の裁縫教室や音楽・フランス語講座、自宅の一室を開放して小さな私塾のような day-school を開いたバイブル・ウーマンもいた¹¹。

1887年秋、少女のための学校をローマ、ナポリなどに複数開校する。ナポリ近郊に開設された学校は、信者が自宅の一室を提供したものであった¹²。同年12月に報告されている1887年から88年にかけてのメソジスト監督派教会女性海外伝道協会からのイタリアの活動への割り当て金額は 4,518 ドルで、日本の 45,827 ドル、インドの 73,012 ドルに比べて少額であるが、前年度よりも 600 ドル以上増額している¹³。

1888年、イタリアにおけるメソジスト監督派教会女性海外伝道協会の活動拠点となる Home と孤児院がローマに開設される¹⁴。1891年には、二人目の女性宣教師エレン・ヴィックリー(Ellen M. Vickery)がホルのアシスタントとして着任した¹⁵。

1887年に開校したローマの学校は、6階建てのビルにある部屋を使用してい

¹⁰ *Heathen Woman's Friend* Vol.18-6, December 1886, p.163.

¹¹ 前掲書 5 *The Story of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, 1869-1895*, p. 357 ; *Heathen Woman's Friend* Vol.19-6, December 1887, p.151.

¹² 前掲書 5 *The Story of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, 1869-1895*, pp.360-361.

¹³ *Heathen Woman's Friend* Vol.19-6, December 1887, p.165.

¹⁴ 前掲書 5 *The Story of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, 1869-1895*, p. 360.

¹⁵ Isham, M., *Valorous Ventures : A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church*, The Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church Publication Office, 1936, p.324.

たが、1892年に一戸建ての家屋に移転する。新しい学校は、サンルームや広い庭も備えていた。また、開校以来5年の間、72名の生徒をHomeに寄宿させた。このうち、37名がカトリック、17名が福音派の信者であった。学校では、聖書を教科書に用いて一般の教科も教えた。その他、裁縫、料理なども教授された¹⁶。

1893年には、前年に賃貸契約を結んだ一戸建て家屋の賃料が高騰する兆しを受け、ホールらは不動産を取得するほうが賢明であるとの判断を下す。女学校として使用するにふさわしい物件を探した結果、女子修道院として建設され、後に英国人篤志家によって孤児院として使用されていた建物を、相場の半額の15,000ドルで購入することを決めた。ホールのアシスタントであるヴィックリーは、購入手続きのためにアメリカの協会本部を訪れるべく一時帰国する。翌1894年5月10日、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会はローマに購入した旧修道院の建物を“Girl's Home School”と命名し、献納式が執り行われた。この建物は「ベネディクト14世により奉げられた女子修道院」と記された大きな碑が残っており、修道院の面影を残す5階建てで、裏地には大庭園を擁していた¹⁷。メソジスト監督派教会女性海外伝道協会の統計によると、この年、イタリアで活動する女性宣教師はホールとヴィックリーの2名、バイブル・ウーマン3名、寄宿制学校1校、生徒40名であった¹⁸。

1897年には、数年来の念願であった上級学校“school of higher rank”がヴィックリーを責任者とし、アパートの部屋を借用して実験的に開校する。10名の入学希望者が現れ、すべてが裕福なカトリックの子女であった。まもなく、ヴ

¹⁶ 前掲書5 *The Story of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, 1869-1895*, pp. 362-363.

¹⁷ 前掲書5 *The Story of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, 1869-1895*, p. 363.

¹⁸ 前掲書5 *The Story of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, 1869-1895*, p. 422. 上述したように、1887年には13都市で13名のバイブル・ウーマンが活動していたとの記録があり、バイブル・ウーマンの数が大幅に減少したことが読み取れる。減少の正確な理由は不明であるが、1894年の3名は有給者のみの数値か、あるいは女性宣教師の着任により、個別家庭訪問よりも女子教育に活動の比重がシフトしたためではないかと筆者は推察する。

イッケリーが実質的な校長となり “The Instituto Internationale” という校名で正式な開校に至る¹⁹。

2年後の1899年には、新校舎のための用地を取得する。その費用には、協会による20世紀感謝記念献金を用いられた。新しく建てられる校舎は、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会のローマにおける活動に尽力したミセス・克蘭ドン(Mrs.Crandon)を記念して“Crandon Hall”と命名された。翌1900年12月20日、60の部屋を持つ広々とした新校舎が完成し、献納式が執り行われた。また、同年、ホーム・スクール(寄宿制学校)を“Via Garibaldi School”と改名した²⁰。

10年後の1910年、Crandon Hallが手狭となったため、5万ドルで購入した土地を13万ドルで売却し、別の場所により広大な土地を買い入れ、1月10日に“New Crandon Hall”の建設を開始する。土地が2倍以上の値段で売れた理由は、近隣にマルガリータ女王(Queen Margherita)の宮殿ができたことにより付近の地価が高騰したためであった。同時に第二号館校舎の建設も始まった。こちらの費用は、カナダ・トロント在住の協会支援者ミスター・マッシー (Mr. Massey) からの寄付が充てられ、“Villa Massey”と名づけられた²¹。

1912年にNew Crandon Hallは完成し、同年に開催されたメソジスト監督派教会中央ヨーロッパ会議結成式参加のために集まったロシア・オーストリア・ハンガリー・フランス・スイス・ドイツ・デンマーク・ノルウェー・スウェーデン・フィンランド・ブルガリアの代表団が新しい校舎の献納式に参列した²²。

¹⁹ 前掲書 15 *Valorous Ventures : A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church*, p.325.

²⁰ 前掲書 15 *Valorous Ventures : A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church*, p.325.

²¹ 前掲書 15 *Valorous Ventures : A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church*, p.325.

²² 前掲書 15 *Valorous Ventures : A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church*, p.325. 1912年にメソジスト監督派教会女性海外伝道協会が女性宣教師を派遣していたヨーロッパの国は、イタリアとブルガリアの2国のみであったが、親組織のメソジスト監督派教会はロシアほか少なくとも11カ国で伝道活動を行っていた。

上級学校の The Instituto Internationale (Crandon Institute) は、南ヨーロッパの優れたプロテスタント女学校として広くヨーロッパにその名が知られ、他国からも多くの生徒を集めた。寄宿制学校の Via Garibaldi School も同様に成長を遂げ、親組織のメソジスト監督派教会から「ローマという地において女子教育の偉業を達成」と賞賛された²³。しかし、この繁栄は、女性宣教師不足を生じさせ²⁴、その結果、寄宿制学校と上級学校という二つの学校に十分なスタッフを配置することが困難となった²⁵。

1914年、アメリカのメソジスト監督派教会女性海外伝道協会本部は、役員をローマに派遣して両校の現状を視察し、その報告を受けて2校を統合することを決断する。協会は、この統合を経済的な理由によるものではなく、あくまでも将来を見越しての方策であると述べた。これまで両校は、貧困層から富裕層まで幅広い階層の子女を受け入れていたが、以後の方向性として、中産階級の子を対象とした教育と教師の養成に的を絞ることとした。それゆえに、寄宿制学校の Via Garibaldi School の閉校が決定し、同校は四半世紀の歴史に幕を閉じた²⁶。

1917年には、Crandon Institute の強化を図るため、女性宣教師イートン(Mary Jane Eaton)が指揮官としてローマに派遣された。イートンは1930年まで同校の運営に力を尽くしたが、1929年以降、良質な教育を提供する公立学校が増えはじめる。それにつれて Crandon Institute の生徒数は減少していった。また、高

²³ 前掲書 15 *Valorous Ventures : A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church*, p.325.

²⁴ ホール(Hall)は1900年に帰国し、1912年の時点でのイタリア在住女性宣教師は、ヴィッケリー(Vickery)のほか、バート(Edith Burt 1906年着任)、リリウェリン(Alice A. Llewellyn 1901年着任)、スウィート(Mary B. Sweet 1912年着任)、スウィフト(Edith T. Swift 1902年着任)の計5名であった。前掲書 15 *Valorous Ventures : A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church*, p.445.

²⁵ 前掲書 15 *Valorous Ventures : A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church*, p.325.

²⁶ 前掲書 15 *Valorous Ventures : A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church*, p.325.

額な税金と校舎の設備投資や修理に多大な経費が掛かり、学校運営は困難な状況に陥っていった²⁷。1929年以降、5名いた女性宣教師は次々と帰国し、1931年から35年までは、イタリアで活動していた女性宣教師は、ルース(Artele B. Ruese 1918年着任)とフォスター(Mildred Foster 1922年着任)の2名だけであった²⁸。

1933年、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会は2年後の1935年に Crandon Institute の廃校を決断する。建物は売却され、その売上金は他の活動の強化に使用されることとなった。1885年に第一号の女性宣教師が派遣されてから、1935年の Crandon Institute 廃校まで、50年の間にイタリアで活動した女性宣教師は16名であった²⁹。ちなみに、1874年の伝道開始から1935年までに日本に在住したメソジスト監督派教会女性海外伝道協会の女性宣教師は132名だった³⁰。

以上、1877年の活動開始から1935年までの60年弱にわたるメソジスト監督派教会女性海外伝道協会のイタリアにおける活動を、時系列に従って概観した。バイブル・ウーマンの家庭訪問による伝道に始まり、信者の自宅を使用した小さな私塾のような day-school、孤児院と寄宿制学校、上級学校の開設と女子教育を柱に着実な発展を遂げた。また、教育の場である校舎も、ビルの間借りから一戸建ての借家、建物の購入、用地を取得しての新校舎の建設と拡大を見せた。しかしながら、1914年の第一次世界大戦勃発の頃から、活動に陰りが見え始める。寄宿制学校の閉鎖に次いで、ヨーロッパの諸外国からも生徒を集めていた上級学校も1935年に閉校となった。

メソジスト監督派教会女性海外伝道協会がイタリアにおいて推進しようとした女子教育は、一時的な開花はあったものの、根を下ろすことができなかった。

²⁷ 前掲書 15 *Valorous Ventures : A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church*, pp.424-425.

²⁸ 前掲書 15 *Valorous Ventures : A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church*, p.445.

²⁹ 前掲書 15 *Valorous Ventures : A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church*, p.425, p.445.

³⁰ 前掲書 15 *Valorous Ventures : A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church*, p.425, p.442.

その要因を論ずるには、カトリック教会との関係性を考察する必要がある。また、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会がイタリアでは成功を収めなかった女子教育が、同時代の日本では結実し、今日も日本の女子教育の一翼を担っている。この事実から、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会がイタリアにおいて展開した女子教育の内容が現地のニーズに呼応するものであったのか、日本において提供されたカリキュラムとの違いはあったのかといった点も考察に値しよう。次章以降、これらの問題について論を進めて行きたい。

3. メソジスト監督派教会女性海外伝道協会とイタリア・カトリック教会との関係

メソジスト監督派教会をはじめとする米国プロテスタント教会が海外伝道を積極的に推進した 19 世紀後半、イタリアを訪れたアメリカの教会関係者の多くが「ローマ教皇とカトリックの迷信の存在がイタリアを精神的・物質的に混沌とした国に貶めている」といった主旨の発言をしている。南北戦争後のアメリカは大きな経済発展を遂げ、それはプロテスタント教会の成長をも促進した。その結果、アメリカの世論は、プロテスタンティズムとアメリカニズムを同義語と捉えるようになる。そのような意識を背景として、メソジスト監督派教会は「カトリックとの絆を断ち、イタリア人を新しく偉大なプロテスタント文明世界の文脈に導き入れる」という使命感を持って、イタリア伝道を開始した。そして、自らの活動を「反ローマカトリックに基づく宗教的改革への強い神の思し召しによるもの」とみなした³¹。つまり、イタリアは、メソジスト監督派教会にとって、プロテスタント化すべき対象地であったわけである。

アメリカの主要プロテスタント教会は各々に女性海外伝道協会を結成し、異教地へ女性宣教師を派遣していたが、イタリアに女性宣教師を送り込んだのは、管見の限りでは、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会だけであった³²。上

³¹ 前掲書 4 “The Methodist Episcopal Church in Italy: 1871–1915,” p.181,p.185,p.187.

³² 長老派教会の研究者である中島耕二氏によれば、長老派教会はヨーロッパを伝道対象地域にしていなかったそうである。また、会衆派教会はトルコとスペインに独身女性宣教師を派遣しているが、イタリアへの派遣はない。(Strong,W.E., *The Story of the American Board*, The Pilgrim Press, 1910.)

述した「カトリックとの絆を断ち、イタリア人を新しく偉大なプロテスタント文明世界の文脈に導き入れる」というメソジスト監督派教会の使命感は、イタリアに派遣された女性宣教師たちにも共有されていたことが、協会機関誌 *Heathen Woman's* (1896年より *Woman's Missionary Friend*) からうかがい知ることができる。

Heathen Woman's Friend は、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会設立3ヵ月後の1868年6月、アメリカのホームベースと異教地とのフィールドのコミュニケーションのツールとして、創刊された。誌面は、女性宣教師からの報告を中心とした伝道地に関する記事、各支部の報告などアメリカ国内の活動に関する記事、献金状況や会計収支の報告などによって構成されていた。伝道地からの報告は、協会が設立した女学校や孤児院、病院などに関するもののみならず、異教地の風景や歴史、文化などを紹介する読み物も多かった³³。

ところが、協会機関誌に掲載されたイタリアに関する報告について言えば、風景や歴史、文化をテーマとしたものはほとんどなく、カトリックの偶像崇拜と聖職者の墮落を糾弾する内容が大半を占めている。そのいくつかを引用してみたい。「イタリアに短時間でも滞在すれば、カトリック信者の頑固な偏見や迷信がいかなるものであるかをたちどころに知ることができる。カトリック聖職者の墮落は、おそらく、世界中どこを探しても、イタリアに匹敵する場所はないであろう」³⁴、「カトリック以外の宗教に触れたことのない人々が、神の代理として尊敬すべきであると教えられてきた聖職者たちの卑劣な人間像を知ることにより、不信仰へと導かれていくのは何ら不思議なことではない」³⁵、「ある女性は、カトリックの家庭に育ったがゆえに、自分は聖書を持っていないと語った」³⁶、「ローマで修道士の行列や偶像崇拜を目撃した時、インドで似たような光景を目にした時よりもはるかに悲しみを覚えた。ヨーロッパはアメリカで

³³ 前掲書1『女性宣教師の日本探訪記 一明治期における米国メソジスト教会の海外伝道一』47～49頁

³⁴ *Heathen Woman's Friend* Vol.17-3, September 1885, p.54.

³⁵ *Heathen Woman's Friend* Vol.17-3, September 1885, p.55.

³⁶ *Heathen Woman's Friend* Vol.17-3, September 1885, p.55.

はない。イタリアはインドと大差ない」³⁷といった強い口調のカトリック批判が展開されている。

協会機関誌は、アメリカで支部活動や献金などを通して女性宣教師を支えるメソジスト監督派教会の多くの女性教会員によって読まれた。継続的に報告されるカトリック教会の偶像崇拜や聖職者の墮落の様子は、イタリアの女性たちがいかに誤ったキリスト教信仰の状況下にあるかを女性教会員に訴え、女性宣教師の働きに対する積極的な支援を促すのに役立ったことは疑いない。しかし、その一方で、カトリック＝悪といった画一的な報告は、イタリアの現状を女性教会員に正しく理解させる妨げになったことも否めないであろう。

メソジスト監督派教会はローマにおいてイタリア語の教会誌を発行していたが、その論調は *Heathen Woman's Friend* と同様、徹底したカトリック批判に彩られていた。イタリア国内の社会的・政治的事件を取り上げた場合でも、すべてがカトリック教会の道徳的墮落に原因があると述べている。メソジスト監督派教会のイタリアにおける活動を調査したチアリーニは、「メソジスト監督派教会の教会誌は、食料品の急騰に端を発した 19 世紀末のイタリアにおける社会暴動の原因を、社会主義者と手を組んだカトリック司祭の巧みな市民操作によるものとし、カトリックへの激しい嫌悪感を示しているが、この解釈は、社会暴動の真意と社会主義者の主張を深く理解する妨げになった」と論じている³⁸。メソジスト監督派教会女性海外伝道協会のカトリック観は、親組織であるメソジスト監督派教会の見解に沿うものである。それゆえに、チアリーニの指摘は女性海外伝道協会に対しても当てはまるものである。例えば、前章の最後に示した上級学校の閉校は、史料が述べる公立学校の台頭や経済的事情のみが原因ではなく、当時のイタリア人女性を取り巻く社会状況や女子教育政策などに対する理解が不十分であったことも関係していると考えられるが、それらについての分析を *Heathen Woman's Friend* に見出すことはできない。

ところで、イタリアのカトリック教会は、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会の活動にどのような目を向けていたのであろうか。カトリック教会も、

³⁷ *Heathen Woman's Friend* Vol.19-10, April 1888, p.263.

³⁸ 前掲書 4 “The Methodist Episcopal Church in Italy : 1871—1915,” pp.191-192.

女性宣教師やバイブル・ウーマンに対して、かなり攻撃的であった。彼女たちを悩ませたカトリック教会からの様々な嫌がらせともいえる行為が協会史料に記録されている。そのいくつかを紹介しよう。

バイブル・ウーマンが家庭を訪問すると、カトリック司祭により扇動された子どもたちが泣き叫びの声を上げ、退去せざるを得ない場合が多々あった³⁹。また、1887年秋、ナポリ近郊に信者が自宅の一室を提供して設立された少女のための day-school は、最初は好評であったが、カトリック司祭による朝夕の学校を非難する長い説教、学校を中傷する大型ポスターの掲示、生徒やその家族に対して破門や未来永劫の天罰が下るとの脅迫といった攻撃により、閉校に追いやられた⁴⁰。さらに、1897年に開校した上級学校 The Instituto Internationale は、カトリック系新聞や司祭からの激しい攻撃の標的となった。第2章で述べたように、最初の入学希望者 10 名はすべて裕福なカトリック家庭の子女であったが、5名の生徒の親は、娘がプロテスタント教会に足を踏み入れることを頑なに拒否した。そして、ついにはローマ教皇レオ 13 世 (Pope Leo XIII) の望みにより、The Instituto Internationale を抑圧するための同盟が形成された。一生徒をスパイとして校内に潜入させ、全生徒を監視し、事実と反するレポートを回覧して、学校を窮地に陥れようと試みたのである⁴¹。

以上見てきたように、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会とカトリック教会との関係は、お互いに敵意と嫌悪感をあらわにしたものであった。この状況を見る限りにおいては、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会ならびに親組織であるメソジスト監督派教会は、他のプロテスタント教会が女性宣教師を派遣していない場所に女性宣教師を積極的に送り込み、現地の宗教を刺激する形で、ラディカルに伝道活動を行っていたというイメージが得られる。だが、これがメソジスト監督派教会の典型的な伝道スタイルではない。筆者がこれま

³⁹ 前掲書 5 *The Story of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, 1869-1895*, p. 358.

⁴⁰ 前掲書 5 *The Story of the Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church, 1869-1895*, p. 361.

⁴¹ 前掲書 15 *Valorous Ventures : A Record of Sixty and Six Years of the Woman's Foreign Missionary Society Methodist Episcopal Church*, p.325.

で研究対象としてきた日本では異なる伝道スタイルが展開されている。次章では、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会のイタリアにおける活動を、日本における活動と比較させながら、その特徴をより鮮明にするとともに、問題点をも指摘していきたい。

4. メソジスト監督派教会女性海外伝道協会のイタリアにおける活動の特徴とその問題点

メソジスト監督派教会女性海外伝道協会のイタリアにおける活動は、日本における活動と比較すると、予算の面では10分の1以下、派遣された女性宣教師の数では8分の1以下と、第2章でその数を示したように、数量的には非常に小規模であった。しかし、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会がインドと中国において力を注いだ病院の設立と医療宣教師の派遣は、イタリアと日本においてはともに実施されておらず、女学校を創設し女子教育を介しての伝道活動が中心であった点は共通している。

メソジスト監督派教会女性海外伝道協会の機関誌 *Heathen Woman's Friend* には、異教地の風景や歴史、文化を紹介する読み物が毎号掲載されていたが、イタリアに関しては、それに類するものが極めて少なく、カトリックを糾弾する内容が多かったことは既述した。では、日本に関しては、どのような記事が掲載されていたのであろうか。日本の宗教をどのようにみなしていたのであろうか。

日本の宗教に関して *Heathen Woman's Friend* には、「神道は死去した先祖を神格化し、先祖の魂を力あるものとして崇拜の対象とする。記録された資料に乏しく、かつ矛盾が多いため、真の教義を知るのが困難である」、「仏教の涅槃は、キリスト教の天国に相当するものであるが、日本人は涅槃が如何なるところであるか説明できない」、「日本人は太陽・月・星・山・川などを崇拜の対象とする。その代表的なものは富士山である」といった記述が見られる⁴²。日本には複数の宗教が存在し、いずれもが混沌としていて、完全に理解するのは不可能

⁴² 前掲書1『女性宣教師の日本探訪記 ―明治期における米国メソジスト教会の海外伝道―』77～78頁

であるといった論調である。だが、対カトリックのように、仏教あるいは神道＝悪との決めつけはしていない。

さらに、日本に派遣された女性宣教師からの報告には、仏教建築の美しさを賞賛し、日本人の自然を敬う姿勢を好意的に捉えている記述がしばしば見られる。その例を紹介しよう。休暇で日光を訪れた女性宣教師は、東照宮について「寺院の庭園はひな壇状に美しく整備されており、長い石畳は苔で見事に覆われ、周囲は常緑樹の巨木がうっそうと茂っている。御影石で作られた手洗い所、塔、鐘楼、重厚な扉、入念な細工が施された門、金色に塗られた屋根などをもつ寺院の美しさを、私はなんとか皆さんに伝えたいと思うが、とてもうまく表現できない。私に唯一できることは、鑑賞することである。このような作品を目の前にすると、私はただ言葉を失う。寺院の内部には、優雅に吊り下げられた金色の布の天蓋、非常に巧みな技を用いて造られた銅製や漆器の装飾品、諸国の王がほしがるに違いない敷物、珍しい木製のさらに珍しい彫刻が施された壁、ユニークなデザインと豊かな色彩をもつ絵天井などがある。ラスキンはヨーロッパ大陸にある大聖堂の色彩に憧れを抱いているそうだが、彼にこの日光の寺院を見せることができたらと思う。そして、彼が何と言うがぜひ知りたい。私がただ感じるだけで言葉にできない多くのこと表現してくれるに違いない」⁴³と記し、筆舌に尽くしがたい美しさに魅了されている。また、青森県の弘前で活動していた女性宣教師は、住まいの2階から眺められる津軽富士とも呼ばれている岩木山に「しばしば勇氣と安らぎを与えられた」と述べた上で、「だが、この感情は、弘前に生まれ育った人たちが抱いている神聖さにはとても及ばないものである。岩木山の奥に宿ると信じる目に見えない神に対して、人々は断食、供物、祈りを捧げるのである」⁴⁴と記し、住民の岩木山信仰に心情的な理解を示している。

上記のような日本人古来の宗教観と結びついた文化に対する女性宣教師の親和的な態度は、イタリアのカトリック教会に対する強硬な姿勢とは異なるも

⁴³ 前掲書1『女性宣教師の日本探訪記 ー明治期における米国メソジスト教会の海外伝道ー』102頁

⁴⁴ 前掲書1『女性宣教師の日本探訪記 ー明治期における米国メソジスト教会の海外伝道ー』161～162頁

のである。女性宣教師にとって、日本の神道や仏教は、知的好奇心の対象でもあったが、イタリアのカトリック教会は、キリスト教の歪められた形態であり、矯正されるべき対象であった。この差が *Heathen Woman's Friend* の誌面にも繁栄され、イタリアにおける活動のラディカルさを浮き彫りしたといえよう。

メソジスト監督派教会女性海外伝道協会のイタリアと日本における活動を比較する際、上述の現地宗教に対する姿勢とともに注目すべきは、女子教育に対する取り組みである。メソジスト監督派教会女性海外伝道協会は伝道地においてさまざまな活動を展開していたが、本章のはじめにも触れたように、イタリアと日本は女子教育に特化していた。

メソジスト監督派教会女性海外伝道協会は、イタリアと日本において、小さな私塾から女子教育をスタートさせ、規模・レベル双方の面において、順調な発展を見せた。だが、イタリアでは、1935年に学校を閉鎖し、教育活動から手を引いた。一方、日本では、明治期にメソジスト監督派教会女性海外伝道協会により設立された女学校の多くが現存している。この違いをもたらした要因として、どのようなことが考えられるであろうか。

日本において、女性宣教師が女子教育に着手した頃、明治政府は学制を公布して初等教育の義務化を宣言した後、中等教育以上の男女別学を規定し、男子の中等教育の整備を漸次進めている時期であった。女子はそこから締め出され、しかも、女子中等教育の整備は後回しにされていた。よって、女子中等教育を規定する法令も存在しなかったため、女性宣教師は比較的自由に独自の教育を展開することができた。女性宣教師は、キリスト教教育・英語教育に力を入れるとともに、自らの出身校であるアメリカの女子中等教育機関フィーメール・セミナリーのカリキュラムに倣い、地理・歴史・政治・経済・心理・数学・物理・化学などといった複数の社会科学系・自然科学系の科目を教授し、それらは男子中等学校のカリキュラムと比較しても、まったく遜色のないものであった。したがって、明治の後半に政府が公立の高等女学校を設立するようになって、十分にそれらと対抗できる教育内容を有していた⁴⁵。

⁴⁵ 前掲書1『「地理的知識」の普及と明治期来日アメリカ人女性宣教師』108～122頁

では、イタリアでメソジスト監督派教会女性海外伝道協会が女学校を設立した頃、現地の女子教育事情はどのようなものであったかを見てみたい。1872年、イタリアは初めて全国規模の教育統計を実施している。それによると、調査を受けた570の教育施設のほとんどが、カトリック修道会の運営によるものであった。さらに30年後の調査でも、公立学校が86校であったのに対して、私立学校は1,429校、そのうち約800校が修道会によるものであった⁴⁶。つまり、イタリアにおいてメソジスト監督派教会女性海外伝道協会が女子教育を開始した時、当地にはカトリック修道会の運営による相当数の女子教育機関が存在していたわけである。

カトリック系の女学校と伍して生徒を獲得するには、カトリック系にはない特色を打ち出す必要がある。カリキュラムなど詳細な教育内容を知り得る史料を見出していないため、はっきりしたことはわからないが、「聖書の重視」という言葉を特色のキーワードとして挙げることは可能であろう。第3章で取り上げたメソジスト監督派教会女性海外伝道協会によるカトリック批判の一例に「ある女性は、カトリックの家庭に育ったがゆえに、自分は聖書を持っていないと語った」という言葉があったが、これはカトリック教会がいかに聖書を軽視しているかを示そうとしたものである。そして、1887年に開校したローマの女学校では、聖書を教科書に用いて一般の教科も教えている。一般教科が具体的にどのような課目を指すのか、また、日本と同様にアメリカのフィーメール・セミナリーに倣い、政治・経済・物理・化学といった社会科学系・自然科学系の科目も教えていたのかは不明であるが、聖書を教科書として複数の科目を教授している点は、カトリック教育機関への強いアピールであったはずである。

19世紀イタリアのカトリック教会は、信者に占める女性の割合が漸次増加していた。教会はその現象を公式に認めた後、母親に信仰の先導者という機能を付与し、「家庭における司祭」という役割を期待した⁴⁷。女子修道会によって運営されている教育機関は、将来母親として信仰の手本となる人材を育成する機

⁴⁶ フレス,G.・ペロー,M. 編, 杉村和子・滋賀亮一監訳 1996.『女の歴史IV 十九世紀1』(藤原書店) 289頁 sous la direction Fraisse,G.et Perrot,M. 1991. *Histoire des femmes en Occident 4,Le XIX^e SIÈCLE* Paris : Plon.

⁴⁷ 前掲書 46『女の歴史IV 十九世紀1』306頁

関であり、プロテスタント教会によってその領域を侵されるのは耐えがたかったに違いない。

第3章で記したように、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会がローマに設立した上級学校を、当時のローマ教皇レオ13世自身が閉校に追いやることを望み、具体的な行動を指示したという事実は、この上級学校がカトリック教会に与えたインパクトの大きさを物語っている。これとは対照的なエピソードとして、日本においては、東京で活動していた女性宣教師の一人が、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会の設立した女学校で教鞭を取る傍ら、華族女学校（女子学習院の前身）に英語教師として招聘され、宮中行事などにも招待されていた⁴⁸。

ここまで、日本との比較を通して、イタリアにおける活動を論じてきたが、その特徴をまとめてみたい。まず、日本での活動に見られるような現地の文化を理解し歩み寄ろうとする姿勢が認められず、カトリック教会への批判を前面に打ち出した活動であった点が挙げられる。そして、その最も顕著な活動が、女学校運営であろう。女子教育政策が未整備で女学校のニーズが高かった日本とは異なり、イタリアのカトリック教会は女子教育に力を入れ、多くの教育機関を設立していた。それにもかかわらず、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会は女学校運営に力を入れた。それはカトリック系学校を明らかに意識したものであろう。

だが、学校運営の実情は、「イタリア人女性のための学校」と一言で表現できるものではなかったようである。第2章でも触れたが、ローマに設立した女学校は、ヨーロッパ他国からの生徒も受け入れていた。おそらく、1912年に同地で開催されたメソジスト監督派教会中央ヨーロッパ会議に出席した国々からの留学生であろう。第2章で記した国名から分かるように、ドイツ・デンマーク・ノルウェー・スウェーデンなど、その多くがプロテスタント国である。つまり、カトリックの中心地である「ローマという地において女子教育の偉業を達成」と親組織のメソジスト監督派教会が賞賛した学校は、プロテスタント国からの

⁴⁸ 前掲書1『女性宣教師の日本探訪記—明治期における米国メソジスト教会の海外伝道—』86頁

留学生によっても支えられていたわけである。言い換えれば、“The Instituto Internazionale” という名称が示すように、この女学校はインターナショナル・スクール（国際学校）であり、カトリック教会に対してプロテスタント教育を標榜する学校ではあったものの、イタリア人女性のためだけの学校ではなかったといえる。

もし、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会が日本で実践したように、現地の文化、つまりイタリアにおいてはカトリック文化の理解に努め、イタリア人女性に的を絞った教育を志していたならば、公立学校の台頭があったとしても、イタリア人女性に十分な教養を授ける教育機関として評価を得、女学校を維持することができたのではないだろうか。

5. おわりに

本稿は、米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会のイタリアにおける活動を、同協会の機関誌ならびに公式に編纂された協会史を史料に用いて、提示することを試みた。限定された史料であったため、活動の全容を明らかにし得なかった。しかし、カトリック教会に対する批判的な姿勢、そして、カトリック系女子教育機関が多数存在したにもかかわらず、敢えて女子教育を活動の柱に据え、カトリック教会に挑んだことは、明確な特徴として指摘することができる。だが、その特徴が、同時に問題点でもあり、活動の継続を困難にしたといえる。

メソジスト監督派教会女性海外伝道協会は、1935年女学校を廃校とした際、建物の売却金は他の活動の強化に使用すると述べている。他の活動がどのようなものであったかは、興味深いところである。例えば、日本においては、明治期の後半になると、女学校運営とともに、出版社を設立して日本語の女性啓蒙雑誌や書籍などを発行し、出版活動による伝道を行なった⁴⁹。当時の日本は、公立の高等女学校が各地に設立されるようになっていた。女性宣教師たちは、女学校の運営に特化した活動の将来性に不安を覚え、出版活動は新たな活動を

⁴⁹ 前掲書1『女性宣教師の日本探訪記 ―明治期における米国メソジスト教会の海外伝道―』173～201頁

米国メソジスト監督派教会女性海外伝道協会のイタリアにおける活動

模索した結果であると考えられる。女学校閉鎖以降、メソジスト監督派教会女性海外伝道協会がイタリアにおいていかなる活動を展開し得たかについては、稿を改めて検証したい。

(お茶の水女子大学 講師)